若　者

米ベンチャー企業への就職

桐 原 正 治*

Getting a job with a venture company in the USA

Key Words: venture company, specialty, English

はじめに

同期の友人らが次々と日本の大企業や大学へ就職していく中，私はアメリカの小さなベンチャー企業に身を置く決意をしました．アメリカと比べるとまだまだとは言え，日本でも最近ベンチャーという言葉が定着しつつあり，今後そういったベンチャー企業で活躍する阪大生も増えてくるのではないかと期待しています．

本稿では，私がどうしてアメリカの小さなベンチャー企業を選んだのか，入社に至る経緯とその後の生活について書きたいと思います．

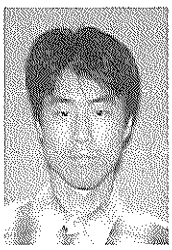
ただし私が入社した会社は社長をはじめとする約半数の社員が日本人なので，一般的なアメリカのベンチャー企業と諸事情が違う事をあらかじめお断りしておきます．

入社の経緯

現代は各分野がより細分化され専門的になる傾向にあります．例えば半導体電子回路と一口に言っても，その専門分野は回路素子(デバイス)からデジタル回路，アナログ回路と多岐に渡っています．それらの一つ，デジタル回路の設計に注目してみますと，動作の高速性を追究するとゲート出力は以前のように単なる0/1で取り扱うのでは不十分で，もっとアナログ的に取り扱う場合も出てきました．また，世の中の低消費電力化の流れに対応するにはトランジスタを単なるスイッチとして見るのではなく，そのデバイスの特性を考慮した設計が必要となってきました．このようにデジタル回路の設計一つを取ってみても，各分野が細分化されていながらも，お互いの分野の関連性はより強くなってきました．そのため今の時代は，関連する分野全てにおいての幅広い知識と，複数分野においてスペシャリストであることが技術者には求められていると思います．

私は大学四回生の時から博士後期課程卒業まで単電子素子の研究をしてきました．幸運な事に周囲は私を単電子素子のスペシャリストとして認めてくれ，その分野の研究者としてやってみないかとのお誘いを企業や研究機関から受けました．しかし，卒業後は単電子素子以外の分野に飛び込んで一から出発する事を望んでいましたので，有り難く思いつつもお断りしました．そんな中，今の会社(Halo LSI Design & Device Technology, Inc.)で回路設計をしないかという話が指導教官を通じて私のもとに飛び込んできました．中学の頃から回路図を片手にハンダごてを握っていた私にとって回路設計は非常に興味のある分野の一つでした．

今在籍している会社，Halo LSI Design & Device Technology, Inc.は現在ほとんどのMOS LSIで使われているデバイス技術の一つ，LDD(Lightly Doped Drain)の開発者である小椋正気氏がアメリカ(ニューヨーク州)で立ち上げた会社で，フラッシュメモリの開発をしています．会社設立が1996年，現在の社員数10人という事を考えると，まさに産声をあげたばかりのアメリカの小さなベンチャー企業であると言えます．私は，以前から興味を抱いていた回路設計ができる上に，技術者として高名な小椋氏の元であれば彼の専門とするデバイスについても深い知識を得ることができ，複数分野でのスペシャリストになるには最高の環境であると思いました．私にとって，入社しようとする会社がベンチャー企業



*Masaharu KIRIHARA
1971年11月1日生
平成11年大阪大学大学院工学研究科
電子工学専攻博士後期課程卒業
現在，Halo LSI Design & Device Technology, Inc., Circuit/System Engineer，工学博士，回路設計
TEL +1-845-298-8828
FAX +1-845-298-8827
E-Mail kirihara@halolsi.com

である事やアメリカの企業である事，つまり日本の大企業でない事は問題ではありませんでした．

妻や両親は最終的には私の決定を尊重してくれましたが，やはりこのような小さな会社への就職は不安だったようです．いや，そう考える人の方が多いでしょう．しかし，ご存知の通りここ数年で大手証券会社，銀行，百貨店などの倒産が相次ぎ，いわゆる名の通った大企業でも安泰とは言えない時代となってきました．私の専門とする半導体業界でも大型倒産はまだないものの，業界全体の不振はよく言われているところです．実際，大手半導体メーカー経験者の話によると，最近は業績不振による組織変更や研究開発費の削減で随分仕事がやりにくくなったそうです．自分はどのような環境で仕事をしたいか，入社した会社がずっと倒産せずに生き残る保証はあるのか，などと考えるうちに会社の大きさは関係ないと思うようになりました．そして，大切なのは自分は何ができるのか，つまり個人の専門性が問われるこれからの時代，生き残るためには自分の能力を磨くしかない，そう思ったのです．

実はほかにも理由がありました．博士後期課程二年の時，幸運にもあるプロジェクトでイギリス(ケンブリッジ)で約一年間研究する機会を得ました．その時が初めての海外生活でしたが，生まれてからずっと日本に住んでいると当然だと思い込んでいる事がとても多いことを知りました．例えば，日本では各駅に沢山の改札機が並んでいますが，イギリスはほとんどの駅に改札がありません．大変驚きましたが，駅に改札があるのが当たり前だと思っていた自分の考えが日本でしか通用しない常識であるという事に，その時まで気づかなかったのです．このような体験によって自分の視野が広がり，今度はアメリカに行くことでイギリスの時とはまた違った発見ができるのではないか，と考えました．

また，学生時代から英語が苦手で，イギリスでは自分の英語力不足を痛感したのですが，再び英語を使わなければいけない環境に身を投じ，英語力を高めたいと思いました．

海外の会社への就職ということに関しては，会社に日本人がいることもありますが，イギリス滞在の経験があるためそれほど抵抗はありませんでした．イギリスでの約一年，まがりなりにもやってこれた，という自信ももちろんそうさせたのでしょうが，その研究所にはイギリス人だけでなく様々な国から来た一流の研究者がおり，仕事をするには環境が整っていれば場所(国)は関係ないという事を身をもって体験した事が大きいと思います．

仕事と生活

小さな会社では全体に対して自分の占める割合が大きく，自分の仕事の成果や言動が好むと好まざるとに関わらず直接影響を与える事になります．それは大きな責任を伴いますが，反面とてもやりがいがあり充実した気持ちで仕事ができます．しかし，人員に余裕がないので，健康管理も含めて自己管理を徹底しなければ周囲に大きな迷惑をかけてしまうことになります．

社員が少ない事のメリットは，意志疎通がスムーズで決定が非常に早く行われる事です．私は大企業に勤めた事がないのでよくわかりませんが，大企業経験者の同僚によりますと，この会社では当日か翌日には決まることが，前の会社では少なくとも二週間はかかったそうです．しかしそれだけ早く大きな方向転換ができる体制にあるので，会社の方針が頻繁に変更され，時には首尾一貫していない印象を持つこともあります．しかし，数年前のインターネットや携帯電話がほとんど普及していなかった状況を例に挙げるまでもなく，変化の激しい今の時代に生き残ってゆくには，どれだけ身軽で柔軟に動ける会社であるかというのは重要なポイントだと思います．

また，歴史の浅い小さな会社には年功序列や理不尽な制度がなく，私のような入社したての若造でも社長に直接意見が言えるのが魅力です．しかし，社歴が浅いため「生き字引」とでも言うべきベテラン社員も，数十年に渡って積み重ねられたノウハウもなく，それらの知的財産はこれから自分たちで生み出してゆかねばなりません．そして，それらを残してゆく方法も確立する必要があります．入社二年目の私にもその役割が求められ試行錯誤で大変な毎日ですが，国際会議への出席などできるだけ勉強する機会を与えて頂いています．今までに京都，サンフランシスコ，ハワイで行われた国際会議に自分の発表がないにもかかわらず出席させて頂きました．

ノウハウがないので，時にはどうしても解決できない問題が出てきます．このような時アメリカでは同業他社と情報交換して解決しています．この点は，最近日本で行われた国際会議(SSDM 2000)でスタンフォード大学の教授が話されたシリコンバレーに

ついての発表の中でも言及されており，アメリカでは転職して前の会社と競争したり，競争相手と一般的な問題について話し合ったりしても構わない社会風潮があるようです．この会社でも社長の人脈を頼りに，教えて頂いた事をもとに問題を解決してきました．

サンフランシスコでの国際会議の帰りにあるベンチャー企業を訪問し，その会社の社長を含む数人の技術者と話す機会を得ました．とにかくお互いわからないところは聞く，そして答える，give and take により双方共にレベルアップしていくのが感じられ，これがシリコンバレーの活気か，これがアメリカのやり方なのか，と感動したのを覚えています．

只一つ残念だったのは，英語力不足のため私にとって満足のいくコミュニケーションができず，折角の機会なのにとてももったいなく感じました．やはり英語は，もっともっと勉強しなければなりません．

非常に小さい会社であるため，仕事とプライベートの境界がはっきりしていないのではないかと感じる時があります．また隣の人とウマが合わなければ他部署の人と仲良くしよう，という訳にいかないので，どうしても人間関係は密にならざるをえません．家族ぐるみでの付き合いも出てくるので，人によってはこのような人間関係を息苦しく感じるかも知れません．しかし私の場合，社長の小椋氏や同僚は皆とても親切で，色々と助けてもらっています．例えば，ご存知の通りアメリカは車社会で，マンハッタンなど都会を除き車なしでは生活すらままならないのですが，車を購入する迄という約束で朝晩同僚に送ってもらっていますし，車種選択のため販売店へ見学に行くのも，平日の昼休みを延長して社長自ら付き合って頂きました．

小さな会社なので福利厚生面は殆ど期待できません．大企業なら，家族手当を始めとする各種手当，社宅の提供，保養所，住宅貸付金等があるでしょう．とは言え，直接社長と交渉し，正当な理由が認められれば，何らかの処置はして頂いていますので，今のところ不自由は感じていません．また，世の中の流れとして社宅や契約保養所を所有する企業も減る傾向にありますので，あまりデメリットだとは思っていません．

イギリスにいた時にも感じましたが，海外での生活は言葉と食事が大きな問題となります．言葉の方は自分で努力して克服すればよいと思うのですが，食事の方は我慢には限界があるし食べない訳にはいかないので，こちらの方がより大きな問題かもしれません．特にマンハッタンのような大都会を除いた殆どの地域では，日本の食材の確保には努力と工夫が必要だと思います．現在は月に一度，片道一時間以上かけて日本の食材の買い出しに行っています．米，醤油，豆腐は近くのスーパーで入手可能ですが，味噌は遠くのオリエンタルショップにしか売っていません．近くには，日本食のレストランはないので日本食が食べたければ材料を調達し自分で作るしかないのです．郷に入れば郷に従えとは言いますが，標準的日本人であれば毎日ハンバーガーでは生きていけないでしょう．

おわりに

アメリカのベンチャー企業に就職した一人として思いつくままに書いてみました．私は他の会社での経験がないので冷静に見れていない面があるかも知れませんが，今，感じている事を正直に書いたつもりです．

私が博士後期課程に進学した時，当時の指導教官が教授に昇進し独立した研究室を持つようになりました．その時，私が最年長の学生で他の職員の方がまだいなかったこともあり，多忙な教授に代わって新しい研究室の机やコンピュータなどの環境を後輩らと共に立ち上げました．その当時の雰囲気が今いる会社にも感じられます．しかも今度は，将来をかけて会社を立ち上げているのです．

結局私は，人が作った枠組の中で自分の研究や開発に集中するよりも，苦労はしてもその枠組さえも自分で作りたいと考えてしまうタイプなのでしょう．研究室立ち上げ時の独特な雰囲気や充実感が忘れられなくて，今の会社を選んだのかも知れません．会社が軌道に乗るまでは大変だと覚悟していますが，それまで苦しみながらも仕事を楽しもうと思っています．

最後に，本コラムに執筆する機会を与えてくださった，大阪大学大学院工学研究科尾浦憲治郎教授，谷口研二教授に感謝いたします．